

博士論文審査及び最終試験の結果

審査委員（主査） 風間 伸次郎

学位申請者 張 盛開

論文名 漢語平江方言の音韻及び文法の体系的研究

結論

張盛開氏から提出された学位請求論文『漢語平江方言の音韻及び文法の体系的研究』について、論文審査と口述による最終試験の結果、審査委員会は博士（学術）の学位を授与するにふさわしい研究であるとの結論に達した。

なお、審査委員会は風間を主査に、副査として学外から早稲田大学教授古屋昭弘氏、愛媛大学教授秋谷裕幸氏、学内から伊藤英人准教授、三宅登之教授、審査協力者として申請者の研究を本学在職中より指導してこられた樋口靖氏を加えて6名で構成された。

論文の概要

本論文は、中国の湖南(湘語)、江西(贛語)、湖北(西南官話)の三省の交差地帯に位置する漢語平江方言の音韻及び文法に関する体系的研究である。

本論文は、長年にわたる現地調査により大量の一次資料を収集し、その整理・分析の上に構築された記述的研究である。本論文は、以下のような構成になっている。

第1章では研究対象、研究目的について、第2章は主に研究方法について記している。研究方法は実地調査とコーパス調査の2つからなり、実地調査はさらにインタビュー調査と会話録音に分けられる。第3章は先行研究の概観である。

第4章では平江各地の方言(8地点)の音声、語彙及び文法特徴について述べている。8地点の語彙はそれぞれ特徴を持っており、平江全体の語彙とも関わっている。ここではこれらの特徴から平江諸方言の再分類を試みている。

第5章は平江城関方言の音韻論について言語学的に考察し分析したもので、その音韻体系を以下のように設定している。

母音 単母音9個 /a e i u ə ə y o/、二重母音4個 /ai au əu əu /

子音 21個 /p p^h m f t t^h n l ts ts^h s tʂ tʂ^h ʂ k k^h ŋ x k^w k^{wh} ?/

声調は7つ、それぞれの調値を/33、13、35、21、55、22、4/と設定した。

音節構造 (C)(V)V(C)

第6章は、品詞の分類、それぞれの品詞の特徴や機能、品詞転換についてである。品詞は大きく分けて、名詞類(名詞、指示詞、人称詞)、動詞類(動詞と助動詞)、形容詞類(形容詞と副詞)、数詞・類別詞、前置詞、助詞、接続詞、間投詞、擬声語・擬態語の9類に分けられる。

ここではいくつかの点で通言語的にも興味深い考察を行っている点が注目される。指示詞、人称詞、形容詞、前置詞についての記述を特に取り上げれば、以下のようなものである。

指示詞は“伊、箇、恩”の3系列である。現場指示では3種とも使用されるが、文脈指示には“箇”が多く使用される。人称詞の特徴としては1人称に除外形と包括形を持ち、3人称に2つのセットを持っていることがあげられる。包括形は聞き手を自分と同じ立場に入れる場合に、1人称単数の代わりに使用することが可能である。2つの3人称の使い分けについては「会話に参加する」または「話題の中心である」かどうかという条件を提案している。形容詞は単独では述語にならず、名詞化接辞“咯”を後続させる必要がある。重ね型では、単音節形容詞にAAの重ね型が多く見られ、変調も見られる。AAAの重ね型は見られない。

前置詞の“把”は処置、道具、使役、受身(特に間接受身)、対象、方位を表す。所在と起点を表す前置詞に共通しているのは、動作が“非使然”(何の原因もなく、自らようになった)であるか“使然”(別の原因でようになった)であるかによって、使い分けをするという点である。

第7章では平江城関方言の統語論を文レベルと句レベルに分けて述べている。文レベルの統語論では基本的語順、主題化、基本文型などを扱っている。基本文型では存在文、提示文、疑問文、否定文などについて述べている。否定に使用される表現は3つあり、一般否定には“不”、過去には“毛”、否定の命令には“莫”を用いる。北京官話と異なる点は、事柄の途中での変化を表すのに、“毛V啞”が使用される点である。これは北京官話に直訳すれば、“没V了”に当たる表現であるが、こうした場合に北京官話では“没V了”は使用できない。句レベルの統語論では名詞構文、動詞構文、形容詞構文について記している。

動詞構文ではテンス、アスペクト、使役、授受、受動、可能などを扱った。アスペクト接辞の“啞”は完了、変化、持続を表し、更にムードを表す機能も持っている。アスペクト表現“落+場所”は動詞の前に来ると、進行を表し、文末に来ると、存続を表す。

第8章では接辞付加、重複、複合の面から、平江城関方言の形態論について述べた。

第9章では呼称のシステムについて述べた。

最後に第10章では平江城関方言の持つ特徴を音韻、形態・語彙、文法の面から、贛語および湘語諸方言との比較対照を行った。その結果平江城関方言は、音韻、形態・語彙、文法の全般において、現在帰属するとされている贛語より湘語との類似性が高いことを示した。特に方言特徴語彙と音韻体系の観点から贛語および湘語と比較対照した結果では、平江城関方言は贛語より、湘語のほうに近い結果となった。この結果から総合的には、平江城関方言を湘語の下位方言に位置づけたほうが適切であるとした。しかし、贛語とも一部共通した特徴を持っていることから、平江城関方言は湘語をベースにした方言であるが、移民による贛語の影響も受けたものと結論付けた。

審査の概要及び評価

上記のように氏の博士論文は、先行研究をよく整理し、それに対する問題提起を行った上で、実地調査により収集した資料をもとに漢語平江方言の全体像を明らかにしたものである。

本論文において、審査委員により高く評価されたのは、以下のような点である。

- ・きわめて精力的な調査により、周辺地域を含む多数の地点で質量共にレベルの高いデー

タを収集している。特に、平江における客家語は氏によって初めて紹介された。

- ・音韻、文法、語彙にわたる総合的かつ体系的な記述である。
- ・筆者自身が母語話者であり、母語話者でなければ不可能であるような内省判断などが多く含まれている。母語話者は自分の母語に無意識であるものだが、氏は高いレベルの言語学ならびに中国方言学の力を身につけることにより、単なるネイティブとしてではなく、優秀な研究者として客観的にこの言語の特徴を解明している。
- ・伝統的な中国音韻学の用語や方法論に頼ることなく、一般言語学的な用語や方法論を用いている点で汎用性が高く、今後の方言研究にとっても大きな意味を持つ。
- ・明らかになった言語事実の単なる羅列ではなく、通言語的もしくは一般言語学的に価値のある発見、ならびに考察が数ヶ所にわたって示されている。
- ・参考文献欄に大量の文献があがっていて、この地域を中心とした中国方言研究の文献を概観するのにも有用である。

もちろん本論文にも改善すべき点が残されている。最終試験において、審査委員からさまざまな質問、コメントがなされた。それらのうち、重要な点としては以下のようなものを挙げることができる。

- ・縮約や文白異読とした現象の位置づけはこれでよいか、この章に記すべき問題か？
- ・広東語とは状況が違うので、声母に K^w の系列を立てることにメリットがない。成節子音による C のみの音節を立ててもよいのではないか？
- ・アスペクトとしたものの範囲が広すぎ、アクツィオンスアルトやモダリティと呼ぶべきものが混在している。
- ・複合語と動詞連続の境界の判断に問題はないか？
- ・文法記述に関しては、普通話においてこれまで築かれてきた精緻な枠組みもさらに参考にして欲しい。
- ・「全濁」の音声的・音韻的性質については、音響音声学的研究なども用いて今後さらに慎重に検討して欲しい。
- ・中国音韻学の伝統的用語、日本語学で用いられる用語に関して、その使い方にもう少し注意すべき点がある。
- ・同音字表をつけて欲しかった。
- ・最近の方言の文法記述によく取り上げられるトピックで取り上げられていないものがある。一部の精力的な方言研究者の論文で参照されていないものがある。
- ・贛語と湘語のどちらの下位方言として位置づけるかについては、判断材料の質的な違いならびに重要度をよく考慮して、さらに検討して欲しい。

これらの指摘も、本論文の全体の価値に対しては何ら影響を与えるものではなく、むしろそのいくつかは本論文の意欲的な試みを認識した上で、さらに建設的な提言を行っているものである。

最終試験における上記のような質問、コメントに対しても、申請者の応答は全てにおいてきわめて的確なものであり、指摘された問題点を申請者がよく自覚し、今後それらを明

確にしていくのに十分な見通しと方法論を持っていることが確認された。また今後の課題の解明に申請者が強い意欲を持っていることも感じられた。

審査委員会は、最終試験（公開審査）の結果も踏まえ、慎重な審議を行った結果、上記のように、申請者 張 盛開氏の博士学位請求論文が、博士（学術）の学位を授与するにふさわしいものであるという結論に達した。